

平成3年度日本語補講報告

桜田千采

- 1) 始めに
- 2) 本年度のクラス編成と時間割り (教材及びテキスト)
- 3) 日本語補講としての取り組み
- 4) 問題点
- 5) 将来の方向
- 6) おわりに

1) 始めに

昭和61年度後期、日本語補講開始時には10名に満たなかった受講生が、現在は既に70名近くに急増している。特に、平成3年度は、前期40名前後だったものが、後期に70名近くに急増した。このような事態に、日本語補講も様々な問題が出てきた。そのような問題にいかに対処し、さらにどのような点が今後の問題として、将来に引き継がれていくのか、本年度の活動記録とともに簡単に報告しておきたい。

2) 本年度のクラス編成と時間割り (教材とテキスト)

前期

クラス	時間数	教場	担当		
I	6/週	城内	島 (2/週)	早川 (2/週)	桜田 (2/週)
II a	5/週	城内	島 (2/週)	早川 (2/週)	桜田 (1/週)
II b	5/週	工学部	藤田 (2/週)	鎌田 (1/週)	桜田 (2/週)
III a	4/週	城内	新村 (2/週)	桜田 (2/週)	
III b	4/週	工学部	藤田 (2/週)	鎌田 (1/週)	桜田 (1/週)
IV	2/週	工学部	北村 (2/週)		
V	2/週	城内	斎木 (2/週)	(学内非常勤)	
VI	2/週	角間	島田 (2/週)	(学内非常勤)	

〈教材及びテキスト〉

I～IV 金沢大学作成テキスト

III, IV 「現代日本事情」(スリーエーネットワーク)

「講義を聞く技術」(産能大学出版部)

「ニュースで学ぶ日本語」(凡人社)

V, VI 独自の教材

後期

クラス	時間数	教 場	担 当		
初級 I	6/週	城 内	藤田 (2/週)	島 (1/週)	桜田 (3/週)
初級 II a	5/週	城 内	藤田 (2/週)	島 (2/週)	桜田 (1/週)
初級 II b	5/週	工学部	早川 (2/週)	鎌田 (1/週)	桜田 (2/週)
中級 a	4/週	城 内	島 (1/週)	斎木 (2/週)	桜田 (1/週)
中級 b	4/週	工学部	早川 (2/週)	鎌田 (1/週)	桜田 (1/週)
中級 c	4/週	角 間	新村 (2/週)	北村 (2/週)	
上級	2/週	角 間	島田 (2/週)		

〈教材及びテキスト〉

初級 I 「しんにはんごのきそⅠ」「にはんごのきそⅡ」(スリーエーネットワーク)

初級 II 「文化初級日本語ⅠⅡ」(文化外国語専門学校)

中級 「日本語中級Ⅰ」(国際交流基金日本語国際センター)

「インタビューで学ぶ日本語」(凡人社)

「中級から学ぶテーマ別日本語」(研究社)

上級 独自の教材

長期休暇中の自主学習用教材として

「日本語いろいろ」(凡人社)

「留学生のための日本語会話」(国際学友会日本語学校)

「絵とタスクで学ぶ日本語」(凡人社)

「中級からの日本語」(新典社)

その他各クラスとも、新聞、ビデオなどを使った独自教材を必要に応じて作成使用

「BASIC KANJI BOOK」(凡人社)を随時使用

3) 日本語補講としての取り組み

- ①クラス分け、時間割り作成に際し、全体的な統一をもたせるよう努力した。
- ②後期に、テキストを変更した。金沢大学作成の教材テキストの在庫がなくなってきたこと、全体の時間数の増加その他の理由により、実情に合わなくなってきたことがその理由である。
- ③それと同時にクラス編成を変えた。1期450時間という時間数で最大の効果を上げうるように、また、キャンパスが分散しているが、どのキャンパスの学部にとっても、学びやすいように、学

生のニーズに応えたい、などの点を考慮しての変更である。

- ④その結果、初級により重点をおいた時間割りにした。初級をⅠとⅡに分け、初級Ⅰに集中的に授業をしたが、全体に200時間をかけて学習すべき教材を90時間で扱ったため、いろいろ問題が出た。しかし、最低留学年数1年という学生もいる現状では、時間的には初級学習時間は半年が限度であろう。また学習内容についても、更に練習を少なくすることは可能であるが、そうするとぐっと定着率が悪くなり、また初級という性質上、文法項目を少なくすることには無理がある。
- ⑤初級Ⅱは、前期にⅠクラスで学んだ学生や、他で日本語を学習してきた学生を対象にした。初級Ⅰに比べるとやや集中度が足りなかった。聴解能力は高まったが、作文にもやや力を入れるべきであったかと、反省している。
- ⑥前期には、ⅢとⅣに分かれていたクラスを中級クラスとして1つにしてしまい、内容を聴解と作文、テキスト中心の基礎力養成、読解力養成と、3つに分け、時間割りによって学生が授業を取る方式を採用した。内容によって難易をつけ、自分の能力にふさわしいクラスに出席すればよいと考えたのだが、実際には学生は時間割りに関係なく出席できる授業には出席した。その結果、学生の要求とともに基礎力中心の授業は新聞やテレビを教材にしたより高度の授業に変わっていった。従って既存の教材では間に合わず、ビデオや新聞を使って新しい教材をかなり開発しなければならず、教師の時間的な負担が大きいものになった。
- ⑦学生の日本語補講へのニーズ分析のためのアンケートを行った。その結果を今後の授業に生かしたい。また、プレイメントテスト時に簡単なアンケートを行って、既往学習歴、日本語補講へのニーズを事前に確認するシステムを確立する。
- ⑧新しい教科書を作成するかどうか、短期間では無理との意見が出て、すでに使用している「文化初級日本語ⅠⅡ」の一部を金沢大学にふさわしい内容に改める、という形で今回は着手、完成した。内容は、教科書本文の一部書き換え、資料として、金沢大学の留学生として必要だと思われる情報をまとめたものを付け加えた。(各キャンパスの図、学生寮の一部図、金沢市石川県地図、バス路線図、写真、金大サークル一覧表等)

4) 問題点

- ①初級から上級へ統一したカリキュラムが組みにくい。

日本語補講開始時の目標は、日常生活に不自由しないようにするというものであったが現在は学生数も増加し、その要求も、日常生活に不自由しなければよい、というものから、論文が書けるようになりたい、というものまでさまざまである。日本語の補講としては、どの程度の能力を最終目的におくのか、もう一度このあたりで考えてみるべきではないだろうか。学生のニーズ、専門学科の指導教員の要求、また専門の授業とのかねあいなどから、ある程度の線が出てくると思われる。それによって、初級から上級(?)まで統一化されたカリキュラムを組み、学生は自分の必要に応じて授業に出るようにする。

- ②絶対的時間数が不足している。

受講生に対して、絶対的授業時間数が少ない。

現在初級に集中的な授業を行っているが、中級にそのしわよせがきている。学生数も中級が最も多く、受講生のキャンパスも3か所に分かれているため、各キャンパスに1クラスずつ3クラス必要である。現在のままでは中級の中をさらに2つに分ける余裕はない。

③日本語補講の授業期間が受講生の実態と合っていない。

現在日本語の補講も大学の他部門と同様1年を前期と後期に分け、1期15週として授業計画をたてているが、日本語を集中して学ばなければならない学生の実情と全く合っていないと言わざるを得ない。各学期の間に2か月におよぶ長期休暇が年2回もあるというのは、語学学習には非常に不都合である。特に集中して学ばなければならない初級においては、ある程度の積み重ねが出来てきたところで、長い休暇に入ってしまうのだから致命的である。また、国費留学生の来日時期（1月と9月）と、授業のスケジュール（4月と10月）も、まったく時期的に関連がない。

日本語補講は大学の授業計画とは別に、たとえば3か月をワンクールとするような授業計画をたてるべきであろう。

④日本語教育専門の専任がいない。

現在、初級中級の授業はすべて非常勤が担当しており、それぞれが個々に教材開発など必要に迫られて行っているが、それが全体の蓄積になっていない。

また、日本語補講の全体を見渡す立場の専任がいないため、統一的なカリキュラムが組めない。非常勤の間でなんとか統一性をはかっているが、専任ではないため限界がある。また、現在のところ日本語教育を専攻してきた者が専任にいないということも問題である。

5) 将来の方向

いつかは、北陸地区の留学生の研修センターのようなものを作り、留学生は、まず金沢大学で日本語の学習をしてから、それぞれの大学に専門の教育を受けるために入学するという構想もあるが、ここではもう少し近い将来について考えたい。

①学生数の増加に比例して時間数を増やす。

それによって、きめの細かい対応が出来る。

初級Ⅰで150時間、初級Ⅱで90時間程度学習したら、あとは学生の必要に応じて時間割りを組めるように、基礎力養成から応用力養成までのクラスを、各キャンパス毎に特徴のあるクラスをいろいろ用意する。同じテレビを使った授業でも、経済ニュースを中心にしたものと、コンピューター産業を扱った番組というように、各キャンパスで変えることもできる。漢字集中学習クラスのようなものも可能であろう。

②日本語補講独自の授業計画をたてる。

初級段階で集中して学習できるようにする。来日直後は、専門の方もまだいそがしくなく、一番日本語学習に時間がかけられる時期でもあり、必要なことは早くマスターした方が、生活する上でも便利である。

大学の授業が休暇中も日本語の補講は休まないようにする。それによって、学習効果が一段と高まる。また、専門の授業との両立もはかりやすい。

③日本語専門の専任教師をおく。

日本語補講の全体を専任教師を中心に統一化する。

教材開発のための共同研究など、現在も自主的な研究会は存在するが、講師全体の研修制度を専任教師が中心になって作る。

④金沢大学の状況に合った教科書の作成。

金沢大学には金沢大学の状況があるのであるから、できればその実情に合った教科書を作っていくべきであろう。

⑤視聴覚教材の充実。

現在初級クラス受講生は、すべてカセットデッキを使って、学習できる。持っていない学生には貸与という形で学校から援助がある。しかし、受講生が増加したらどうなるのか。また、ビデオデッキ一つにしても、各キャンパス全部にあるわけではない。むしろビデオデッキが持てるのは、学生部の好意によっているのではないか、という感さえするのである。これからは、予算の使い方ももう少しわかり易いとありがたい。また、受講生も当然増加すると思われるが、それに伴って、省力化という点からも教材を充実してほしい。漢字、ひらがななどの独習用のパソコンソフトなど、コンピューター応用の教材なども（すでに金沢大学には存在するという噂もあるのだが、我々日本語補講の講師のところまでは、どこにあるのかも伝わってこないが）ぜひ、備えてほしいものである。

⑥開かれた日本語補講でありたい。

今回のアンケートで、日本人学生が「日本語の補講をしていたなんて知らなかった」といったり、われわれも始めて教室の留学生の指導教官を知ったりした事実から、日本語補講授業について、もっと学内でアピールする必要があるのではないかと、また、教材作成に関しても、専門の教師ともっと話し合い協力した方がいいのではないかと、という意見も、われわれの中にはあることを報告しておきたい。

6) おわりに

この1年をふり返って、各クラスの連絡ノートはあっても、記録として残すところはどこにもないことに気づき、急いでこの報告をまとめた。この1年のわれわれ非常勤講師の日本語補講への取り組みと、そこから見えてきたものをまとめた。楽しく、やればやるだけ効果が出てくる、とても面白い1年であった。一緒に授業をした仲間、常に大きな助けになって下さった留学生係に感謝したい。